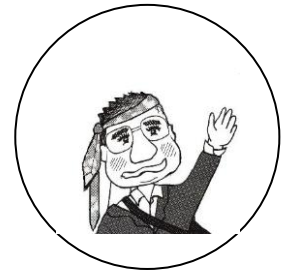


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

インドから高野山へ

インドから大魔王組が帰国、3月11日に高野山にお参りしてきた。お世話になっている藤田光寛先生(元高野山大学長)が、最高僧位の「法印さん」になられた。その「転衣式」にご招待を頂戴したからである。真言密教の法脈を受けついでことを披露する金剛峯寺最大の儀式である。弘法大師空海の緋色(赤オレンジ色、サフラン色)の法衣を纏う、つまりお大師さんの名代を勤めるという大役である。一年間は、高野山の最高僧位として、すべて緋色の衣、袈裟、下駄、杖を身につけ儀式の導師を勤める。お山を下りることは出来ないそうである。

わが輩はつまらぬことを思い巡らせた。急病や手術になった場合どうするのか。医師がお山に登って来るのだろうか、などと俗人らしい心配をした。一年間は、お一人で行動できないそうである。常に隨身が付き添うことになる。ちょっと、そこまで買物に、といった場合は、どうなるのか、これもまた俗人の心配事である。

緋色はインドの色と言ってもよい。おそらく空海が中国で出会ったインド密教僧が緋色の僧衣をまとっていたのであろう。緋色(Bhagwa)は、火の色、浄化、変身、想念を焼き尽くすなどの意味がある。緋色の衣は、自己にとっては在俗ではなく出家であることを自覚し、他者に出家であることをアピールするためのものである。在家者から食べ物の供養を受ける時の目安になる。タイの僧院に居候していたとき、僧とともに朝の托鉢にでかけたが、だれもわが輩に食べ物を布施するものはいなかった。(当たり前だけど)

当然ながら世俗の財を放棄した者は、仏教の糞掃衣(袈裟)のようにシンプルなものを身につけなければならぬ。しかし、日本各宗派にみるように、袈裟・法衣は中国仏教の影響を受け華美になってしまった。実際問題、あの暑いインドから気候の厳しい西安などの地に来ると、一枚の糞掃衣では日常を過ごすことができない。法衣を着て、その上に袈裟を纏うことになる。特に袈裟は宗教的シンボル化してしまった。裸足では歩けないので下駄や足袋を、首回りが寒いのでマフラーだって必要になってくる。

ヒンドゥー教の出家者が纏う衣の色は、サフラン色、オレンジ色、深い黄土色などがあり、僧団の僧位(僧歴)などによって色が異なるようである。また、見習い僧は白衣を身につける僧団もある。

さて、毎日身につける僧衣は、天然素材の染料を使用するので退色してしまう。インドではウコン(黄色)や樹皮などを固めたもので洗濯染色していたようである。現代では化学染色なので退色することは殆どない。スリランカの仏教僧も同じで、伝統的に檳榔樹の実で染色する僧院は殆どないとのことである。

高野山では、お大師さんの衣は宝亀院の井戸からくみ上げられた水に数種類の薬草を加え煮詰めて染め上げる、と高野山サル学博士が教えてくれた。わが輩は宝亀院について知らなかったが、穴場だ！

高野山はまだ寒い。雪が残っていた。インドで毛穴全開のわが肉体にとって他人様の二倍寒い。それでも転衣式を、この眼で拝してみたいという熱望があった。金剛峯寺に入ると、儀式の間は、取材陣で埋まっていた。肝心の法印さんがすわる高座「礼盤」が見えない。僧二人ずつが高座に進み出て、法印さんにお祝いのご挨拶をする。その僧たちの一部と、わが輩の前にいる参列者の頭・頭しか見えなかった。前列の人がスマホで動画撮影していたが、それを通して儀式を見るという、なんとも味気ないことになってしまった。

廊下の板から足裏に寒さが伝わってきた。それでも我慢した。ところが同行のプルニマ・ガールズ三名は、「藤田先生が全く見えない」といって、あっさりと控室に引き下がってしまった。それで一瞬熱望もぐらついたが、わが輩は金剛峯寺の寒い廊下で耐え忍んだ。

転衣式のあと祝宴があった。二段重のお弁当が準備されていた。有名な仕出し屋さんのものだという。とても食べきれない。わが輩は「貧乏性」のため、食べつくさねばならぬと無理やり詰め込むことにした。祝宴会場を見渡すと殆ど人がいない。周りの人たちはさっさと持ち帰ったらしい。その間プルニマ・ガールズは、まだかまだかとわが輩を待っていた。

(待てば海路の日和あり)

玄関に向かうと、駕籠が待機しているのを見た。聞けば法印さんが駕籠で自坊（大圓院）に帰るとのこと、これはラッキーだ。ここで待っていれば必ず藤田先生にお会いできる。前官さん（法印の前任者）が去り、いよいよ藤田先生が隨身とともに下りて来られた。正座合掌してお見送りしたが、お顔はお疲れのようにみえた。古式にのっとり駕籠がゆっくりと歩み、高野山に緩やかな時が流れたように感じた。

金剛峯寺は座主が最高位、真言宗管長も兼務する。「法印さん」も最高僧位である。どっちが偉いのか。管長は選挙で選ばれる真言宗の最高職である。サル学博士に聞いたところ、座主・管長は宗教法人のトップで、「法印さん」のような宗教的シンボルとは異なるとのことであった。

真言宗座主は選挙で選ばれるが、天台宗座主は年齢順によって選ばれる。だから「天台宗では問題がおこらない」と天台宗某僧に聞いたことがある。

ちなみに、現座主は長谷部真道大僧正である。わが故郷・兵庫県香美町香住の大乗寺が自坊である。丸山応挙の寺として有名である。山陰の銘酒「香住鶴」の近くにある。これといって観光資源のない海辺の地域であるが、強いて補足すれば、松葉ガニ、余部の鉄橋、浜坂・湯村温泉であろうか。

ついでに、余計なことを付け加えておこう。

福本清三という俳優をご存知だろうか。福本も香住の出身である。最近でこそトム・クルーズの「ラスト・サムライ」で、その名を知られるようになったが大部屋の無名俳優であった。不器用だが、こつこつと「切られ役」に徹してきた。下積みを辛抱強くつとめていると、いつか「どこかで誰かが見ていてくれる」ものだ。これは「山陰もの」の生き方であるといえはたはずれであろうか。山陰の杜氏は、生真面目で辛抱強いと畿内で知られていた。

福本の本名は「橋本」である。「橋本」姓の名優がいるので「福本」になったというエピソードは面白い。わが輩とは遠い縁がある。わが妹の夫の姉の夫の従兄だそうだ。(つまり全くの他人)

さらにもう一つ加えておこう。

われら大魔王組は2月11日にインドに向かった。その数週間前にバラタナーティアム舞踊家ダヤ・トミコさんから電話があった。シヴァラートリー祭で奉納舞踊するという。偶然にもわれらが滞在する南インド・ティルヴァンナーマライであった。ダヤさんも香美町出身で、わが輩はダヤさんを「山陰もの」だ

と思っている。わが親類に同級生もいるので、一方的に親しみを感じている。

バラタナーティウムにはながらく先駆者がいて目立つことがなかったが、今やその存在は大きい。ダヤさんの舞台は何度か観たが、インドで観たことはなかった。舞踊の王シヴァ神（ナタラージャ）のエネルギーを一身にうけ、汗ほとばしる演舞の躍動感に観るものに震撼を与えた。

その大寺院の舞台に至るまでのわれらの右往左往を記録しておこう。

15日午後10時に出発し、大寺院に入ろうとしたが、数千人の参詣者で溢れていた。この列に加わると3、4時間はかかってしまう。そこでFree Entranceの列で東門をくぐり抜けたが、前に進むことができなかった。警備員に舞台はどこか、と聞くと、「舞踊なら東門の外」と教えられ、外にでてみると門前に舞台があり奉納舞踊が行われていた。地元の子どもたちが演舞していた。彼らの先生に「日本人舞踊家」について聞くと、寺院の内陣であることが判明し、またまた履物を脱いで、再び東門をくぐり抜けたが、またもや前に進むことができず困惑してしまった。これでだめなら引き返そうと諦め気分になった。警備責任者に懇願すると、特別に非公開の扉の鍵を開けてくれ、長い回廊をひた走って、やっと舞台に辿り着けた。午前0時になっていた。正に演舞が始まったタイミングであった。

演舞が終わり、わが輩が観客席を振り返ると数千人の観客がいた。ところが、終わった瞬間にその場で横になって寝てしまった。数千匹のマグロ状態をみてわが輩は驚き「これこそインド！」を感じた次第である。

これを帰国後に、ダヤさんと同年齢の妹に話したところ、そのパワフルさにびっくり。それよりインドでの偶然性に感動し、「郷土の誉だ！」と賞賛した。

追記:われら大魔王組に、偶然にも高野山の女性が参加していた。しかも藤田先生の大圓院にご縁が深い。いろいろ偶然・必然のインドの深さが面白い！